



望ましい死に方とは何か 「いのちがいちばん輝く日」 —あるホスピス病棟の40日—

監督／溝淵雅幸 プロデューサー／山田哲夫 撮影／長谷川智章 ナレーター／みるき 制作・著作・配給／「いのちがいちばん輝く日」上映委員会 2012年 日本 95分 2月2日より東京・新宿K'sシネマ、2月9日より大阪第七芸術劇場、京都シネマ、2月23日より元町映画館等全国で順次公開

●先行き不透明、不確実なことばかりの世の中で、私たちの誰もがやがて死ぬという現実だけは不動であるにもかかわらず（あるいはそれゆえに？）死そのものを直視した映像作品は多くはない。初めて終末期患者へのホス

ピスケアの現場を密着取材したドキュメンタリーである本作は、人間の死を冷厳な現実であると同時に、次世代へと繋がる温かい生命の流れとしてとらえようとしている。

●6年前に発足した滋賀県近江八幡市のホスピス「希望館」。主治医の細井医師は自身もがんを患った経験から、患者と同じ目線に立つために白衣を着ない。看護師らスタッフも、入院患者やその家族にまるで肉親のように寄りそい、院内は明るく穏やかな空気に満たされている。時々下手なハーモニカを披露しながら乳がんの女性、肺がんによる呼吸苦と闘いながら冗談を飛ばす老人、全身にがんが転移しているのに院内の行事を手伝う中年の女性らさまざまな入院患者の姿が描かれる中で、元高校の音楽教師だった池本という老人に焦点がしぼられる。

●池本は首の付け根にがんの腫瘍ができ、余命1年と宣告されていた。死ぬ前に東京で生まれたばかりの孫（次男の子供）の顔を見たいという彼の希望を実現するために、家族と病院ぐるみの綿密な作戦が展開され、みごとに成功する。しかし、病院に帰った後、池本の容態は日一日と悪化。細井医師は池本の家族を呼んで、最期の時をどのように迎えるかを相談する。ついにその日が来て、カメラは臨終の一部始終を記録する。

●ホスピスの活動は20世紀初頭英国で始まり、日本では1973年に大阪で始まったという（もちろんそれまでも、個々の医師による

ケアがあったに違いない）。終末期の患者にとって必要なのは苦痛を軽減する治療だけではなく、避けられない死を迎える心の準備を整えてもらうこと。医師、看護師、ソーシャルワーカー、牧師から成る看護チームがその環境づくりのために、毎日熱心にミーティングを重ねる姿が描かれる。ここにあるのは、「科学技術の進歩」に伴い延命至上主義が支配的と言われる大病院の医療現場とは対極的な終末期医療の姿勢である。

●急速に進行する社会の高齢化の中で、限られた医療予算・人的資源を考慮すれば、終末期医療はごく一部の恵まれた患者だけが享受できる特権であり、本来は宗教者が果たすべき領域ではないのか、という批判が聞えてきそうだが、そもそも医療の目的が単なる生物学的生命の延長以上のもの（たとえば、患者の幸福追求の余地の確保）であるとするなら、あるいは、人間は誰しも自分の人生をふり返り、満足とまでは行かなくともせめて心安らかに死ぬ権利があるとすると、その死に方にかんがりの社会的コストをかけるのは当然だと考える社会であってほしい。

●とはいえ、どのように人生を終らせるかは最もプライベートな領域の問題である。たとえ肉親による愛情のこもったものであれ、「演出された死」は拒みたいとする人がいても不思議はない。自分はどういう死を選びたいかを、否応なしに考えさせられた。

本野義雄（もとの・よしお／本誌編集委員）